

看護の原点

高岡市民病院 看護科

看護師 村井 圭

Sさんとの出会いは、私を看護の原点に返してくれました。

Sさんは、前立腺がんで骨転移がある患者でした。いつも新聞を読んでいた、話しかけても目を合わせない人でした。口数が少なく、気難しそうで近寄りたがたい印象を受けました。

骨への負担を軽減するために、コルセットを装着し、ベッド上安静を強いられていました。しかし、Sさんは歩くことを強く望み、「いつになったら歩けるのだろうか」と言い続けていました。私は、Sさんと医療者との思いのずれを埋めるために、なぜ歩いてはいけないのかを何度も繰り返し説明しました。けれど、どれだけ説明してもSさんは歩くことをあきらめませんでした。私は、Sさんを病識のない患者と感じるようになっていきました。

その状況は変わらないまま療養生活が続きました。久しぶりにSさんの担当になった私は、Sさんに歩くことにこだわっている理由を何気なく尋ねてみました。すると、Sさんはため息をつき、答えました。

「私は母を残して先に死ねない」

私はこのとき「はっ」とし、全身から火がでる思いをしました。Sさんの気持ちも知らずに、ただ病気を理解していないと決めつけていた自分を恥ずかしく思いました。そしてSさんは、妻と離婚したいきさつや妻とは音信不通であること、2人の息子も遠方におり当てにできないことなど、ポツリポツリと話してくださいました。

私がSさんに感じていたマイナス感情はなくなり、なんとか家に帰してあげたいと強く思うようになりました。私のこの思いをチームメンバーに話し、主治医も交えたカンファレンスで、歩いて自宅に帰ることを目的にしました。リハビリテーションを開始し、チーム一丸となって在宅に向けて取り組むことになりました。その結果、4点歩行器での歩行ができるようになり、お母さんの待つ家にSさんは帰りました。その後、Sさんが自宅にいられた期間はわずかでしたが、Sさんの思いをかなえることができました。

私はSさんとの出会いをきっかけに、医療者としての思いを患者に押しつけていたことに気づかされました。看護師として経験を積むことで、ある程度患者の状態を予測することができるようになり、つい勝手な思い込みで押しつけの看護をするようになっていました。私は、患者の思いを聴くという原点に戻り、日々患者と接することを心がけるようになりました。この大切な看護の原点を忘れず、出会った患者一人ひとりの思いに寄り添い看護していこうと思います。